

## 音楽と音の本収録

### 音楽と音の本【2015No.14】(HP 収録)

分類：単行本

著者・編者：宇野功芳

書名：演奏の本質

副題：宇野功芳対話集

発行所：音楽の友社

発行年度：2015年2月

備考：

概要：



本書のキャッチフレーズは次のとおりです。

「『ブルーノ・ワルター』『目指せ! 耳の達人』に続く、宇野功芳 MOOK 企画の第3弾。今回のテーマは「演奏の本質」。クラシック音楽における「名演奏」とはなにか? 本書では、音楽評論の第一人者・宇野功芳が、ヴァイオリニスト、ピアニスト、指揮者、音楽評論家、作曲家たちと、対談や書簡を通して、それぞれが思い描く「いい演奏=演奏の本質」について意見をぶつけ合う。どんな結論にたどり着くのか。ファン必読の MOOK。」

本書の内容は対談編と書簡編から構成され、対談相手ならびに書簡交換の相手は下記のとおりです。

#### ■対談編

野口剛夫、上岡敏之、佐藤眞、遠山慶子、佐藤慶子、金子建志、  
H.J.リム

#### ■書簡編

喜多尾道冬、みどり・オルトナー、佐藤久成

本書は、指揮もなされ、音楽評論家でもある宇野氏が、指揮者や演奏家や作曲家や評論家などの論客との対談の記録や往復書簡をまとめたものです。本書の「演奏の本質」に

関する鋭い指摘は首肯するところが多いのですが、音楽のプロフェッショナル達の音楽の聴き方が自分のようなアマチュア音楽愛好家と違った並はずれたレベルにあることに驚かされます。ましてやオーディオマニアは音楽の何を聴いているのだろうかと感じ入っています。

本書に現れた「演奏の本質」に関する指摘に興味を持ったところを以下に述べてみます。まず始めに「利が美の世界に大きな影を落としている」、「美が利に敗れてはいけない」と指摘されています。コンサートも興業利益を上げなければ成立しませんから、一定程度の利への配慮は必要でしょうが、しばしば美を二の次にしたコンサートがあることも事実です。

良い演奏とは、「まず弾く人が楽しくていい」、「演奏者が気持ちよく弾けるのが一番」で、「その演奏者の気持ちが聴衆にも伝わる」ということ、「曲が喜ぶような演奏が一番」、「曲が得をする。」という指摘もあります。確かに演奏者の気持ちが聴衆に伝播し、音楽そのものが輝くような演奏が重要だということは良く理解できます。

対談の中での発言ではありませんが、朝比奈隆の言葉の引用で、「われわれはまず芸人でなければならない。その芸人たちの中のほんの一部の人が聴衆から芸術家と呼ばれるのだ。われわれは芸を聴いてもらう。だから芸を持っていない人は芸人でなく、ましてや芸術家などになれる筈はない。」ということも心に残りました。朝比奈隆だから言えることであって、蓋し、芸もないのに芸術家気取りをしてみたり、テクニックばかりを誇示することに終始する芸人演奏家がいるのも事実でしょう。

「聴き手への受容の道を作ることと同じく、作品をよく知り、消化し、演奏者の時代の個性を反映しつつ、常に新しい息吹を与えて、その作品の永遠の命の一つとなること、そして聴き手の感性と知性に訴えかけてその精神の糧となること」が「演奏の本質」であると喝破されていることも重要なポイントだと感じました。

さらに続けると、「曲の良さが出ていること。演奏家は見えなくて良い。」、「一番大事なのは偉大な音楽家の精神の継承」、「演奏家としての使命は純粋に音楽に正直に素直にならなければならない。」、「魂のこもった演奏を聴いた人々が心豊かになり、幸せになることが演奏家の本望である。」、「再現芸術家の仕事とは作品を産み出してくれた作曲家に敬意を抱き、楽曲の理解に努め、その核心に迫り、本質を抉り取って生き返らせる行為をすること。」、「個の特徴がきちっと出ていて、それが思い付きや偶然ではないこと。」などなどです。また、フルトベングラーの言の引用で「芸術で一番大事なのは比較ではなく、愛である没入だ。」というのもありました。

宇野氏が「聴き手にも才能がいる。」と言われているのにはギクッとさせられます。オーディオを再生芸術だとする向きもありますが、先の朝比奈隆の言を借りると、再生芸にも至っていない音のお遊びみたいなレベルに終始しているところも多々あり、本書を読んで考えさせられるところが大きかったと感じています。

音楽は、絵画、彫刻、工芸、建築などの存在物そのものが対象の芸術ではなく、再生芸

術であるという点では、演劇や写真に似ていますが、時間軸の入ったという点では写真とは違います。オペラやバレエは音楽と演劇的要素が重なり合ったものと言えます。最後に宇野氏は強面の孤高の御仁かと思っていましたが、対話の相手に女性や若手の演奏家を選んだり、相手によって柔軟に議論を展開し、結構脱線話もあったりして、氏の豊かな人間性を知る良い機会になりました。

本 HP の同じページで紹介した、西原稔・安生健編「アインシュタインとヴァイオリンー音楽のなかの科学ー」（ヤマハミュージックメディア）が、科学と言う知と理の面から捉えた音楽論であるのに対し、本書は美の面から捉えた音楽論で好対照に思います。

<http://audiokenkyu.sakura.ne.jp/wordpress/wp-content/uploads/2014/04/c4640af555eb5030e701538f8e3eddbc.pdf>